



Title	『花桜折る少将』試論：「もの言ひし人」はなぜ回想されたか
Author(s)	岡田, 貴憲
Citation	国語国文研究, 158, 1-9
Issue Date	2022-02-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89211
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_158_01-09.pdf



[Instructions for use](#)

『花桜折る少将』 試論

——「もの言ひし人」はなぜ回想されたか——

岡 田 貴 憲

一

月明かりを暁の薄明と勘違いし、まだ夜深くに女の許から辞去した主人公は、女の心中を慮り自らの失態を悔やみつつも、自邸への歩を進める。陰りの無い月光が静寂の帰途を照らし、立ちこめる霞に桜の木々も紛れて見える景色の中、彼が心惹かれたのは、かつての恋人の住まいであった。——『堤中納言物語』が収める十の短篇の中でも、主要伝本の配列に従って劈頭に置かれることの多い『花桜折る少将』は、起筆部にこのような展開の技巧を凝らして、主人公の新たな恋が芽生える舞台へと読者をいざなう。本稿で取り上げたいのは、その元恋人をめぐる以下の一節である。

いま少し、過ぎて見つる所よりも面白く、過ぎがたき心地して、そなたへと行きもやられず花桜匂ふ木陰に旅立たれつつとうち誦じて、「早く、ここにもの言ひし人あり」と思ひ出でて

立ちやすらふに、築地の崩れより、白きもののいたくしはぶきつつ出づめり。あはれげに荒れ、気なき所なれば、ここかしこ覗けど、咎むる人なし。このありつる者の返る呼びて、「ここに住み給ひし人は、いまだおはすや。『山人にも聞こえむといふ人あり』とものせよ」と言へば、「その御方は、ここにもおはしません。何とかいふ所になむ、住ませ給ふ」と聞こえつれば、「あはれの事や。尼などにやなりたるらむ」と後ろめたくて、「かのみつとをに逢はじや」など、微笑みてのたまふほどに、妻戸をやはらかい放つ音すなり。

(一オ―二オ)

邸内から姿を現した「白きもの」に問いかけた主人公は、かつての恋人がここにはすでになく、他所へ居を移していたことを知る。尼にでもなつているのか、そう自責の念に駆られたためか、彼は苦笑しながら「かのみつとをに逢はじや」の謎めいた一言を残すが、鋭く感じ取った新たな住人の気配によって、彼女の記憶は早くも薄らいでしまう。

ここで主人公が、元恋人の現況を「厄」と推測した理由については、

この女は、おそらく身寄りもなく、中將の愛情にすがって生きてきたのであろう。家屋敷を処分して、山里とか京を離れた水辺とかに身を隠したのか。

(三角洋一『講談社学術文庫 堤中納言物語全訳注』²)
のように、以前は自身が全面的な庇護を与えていたがゆえとみることができるが、加えて本稿では、

・特定の場所を言ったのであろうが、表現上ここは「なにかいふ」と伏せたのであろう。

(池田利夫『笠間文庫 原文&現代語訳シリーズ 堤中納言物語』³)

・或いは「何とかいふ所」とは「某(その地名はわかっているが物語の上ではわざとかくしたという形で)とかいうところ」すなわち現代なら「××とかいうところ」と記されるべき言い方であったのかもしれない。(松尾聡『堤中納言物語全訳』⁴)

のように、「何とかいふ所」を読者に対する臚化表現とし、主人公に対しては具体的な所在が伝えられたとする指摘を踏まえる。それは、

・そのわたり近きなにがしの院におはしませ着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。(『源氏物語』夕顔・①一五九頁)⁵

・癩病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへどしるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、あ

る人、「北山にまむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。……」(『源氏物語』若紫・①一九九頁)

などの、実在の地名を伏したと思しき「源氏物語」の手法を模したものとみられ、「白きもの」から女性の出家隠遁に相応しい地名を告げられたからこそ、主人公は彼女の様変わりを思い、「後ろめたく」覚えたのだと考えられる。

二

だが、そもそもこの一節は、何を目的としてここに描かれているのか。問題点をより明確に言い換えるならば、主人公の新たな恋の相手となるべき女は、なぜ、彼がかつて関係を持った恋人の邸に住まっている必要があったのだろうか。

『花桜折る少将』をめぐっては、作品の前後半に統一性を欠くという指摘が従来なされており、右の問いに関わる言及もその中に見出すことができる。例えば玉上琢彌「昔物語の構成」⁶は、この小篇の構想については「短編小説にすることもできる着想である」と高い評価を与える一方で、前半部での現在および過去の恋人をめぐる描写について、以下のように厳しく指摘する。

ところが書き方が無茶苦茶である。姫をはじめてみた家は、主人公の少将のものゝ恋人の家であった。今の恋人の家を朝はやく出た少将が、ふと昔の恋人の家の前を通り、今もいるかとうかがう。昔の今のと、幾人もの恋人を出すことが、この作品にどれだけの効果をあたえるか。色好みの主人公の姿を、読者に

とりあえず示すつもりなのであるうか。しかし当時としては、これぐらいのことは別にことわらないでも、読者は先刻御承知である。それよりもっと困ったことには、少将はその家から出て来た小者に昔の恋人のことをたずねてみるのだが、その時、その恋人の恋人、つまり恋敵の男であるが、その男の名を口にしてたずねている。こんなことがこの作品に何の必要があるのか。毛頭ない。無用のものである。このように書きはじめてしまつては、読者をしてこの作品のねらいのどこにあるかについてまどわさしめるのみであつて、短編小説としては書いてはならないことなのである。着想は短編小説的だが、できあがつた作品は落第である。

また、鈴木一雄「『堤中納言物語』覚書」⁽⁷⁾は、主人公が垣間見を終えて帰郎した後に描かれる、友人達との交流にも視程を広げ、やはり後半部に対するそれらの脈絡のなさを以下のように述べている。

後半部の展開にかくも手腕を発揮する作者が、しかし前半においてほしいへんちがった書き方をしている。文章の調子や敬語の使用のしかたの相異から前後別作者説まで提出されているほどである。ここでは、近代短篇小説の求心的な全体的統一、単一のプロット、単一の効果など、もとより考えられていない。冒頭の「夜深く起き」てきた家、今の恋人、源中納言の姫君の家にもと住んでいた昔の恋人、その当時の恋仇の存在、今の恋人との贈答、さらに遊び友達との連歌等々、かならずしも後半の事件とは結びつかない人や情況が前半部に並んでいるのである。物語本文を改修してむりにも前後の人物を合致させる立場

もあるが、現存の本文に忠実なかがり、理想的な主人公らしいこの登場人物の一つ一つの歩みを並べ、その生活の幅と興行とを断片的に暗示するものと受け取らざるを得ないであろう。

ここで同論は、波線部のように「理想的な主人公」としての「生活の幅と興行」を、それらの記述に読み取ろうとする。しかし、現在の恋人および友人に関する記述と、元恋人に関する記述とを、どのように同列に扱うことは果たして妥当だったか。

たしかに、「遊び友達との連歌」は、一見「後半の事件とは結びつかない」余計な描写のようである。しかし、それが桜花を題として詠み交わされ、通説に主人公の詠とされる、
散る花を惜しみとめても君なくは誰にか見せむ宿の桜を

の一首から、
戯れつつ、諸共に出づ。「かのみつる所、尋ねばや」とおほす。
(四オウ)

への流れで、「桜多くて荒れたる宿」(五オ)に住む新たな女の素性を追尋しようとする、彼の心の動きを引き出すものであつてみれば、決して単に「生活の幅と興行」とを断片的に暗示するもの」とは片付けられないことは明らかである。

また、主人公が新たな女を「物へ詣づるなるべし」(二オ)という状況下に発見し、その容姿と振る舞いを、

下るるほどいと悩ましげに、「これぞ主なるらむ」と見ゆるを、よく見れば、衣脱ぎかけたる様態、ささやかにいみじう子めいたり。もの言ひたるも、らうたきものゆうゆうしく聞こゆ。

「嬉しくも見つるかな」と思ふに、やうやう明くれば、帰り給ひぬ。(三才)

と明瞭に焼き付けるためには、一般に女性が室内に留まっている時刻でなく、夜深くから明け方にかけての垣間見が必要であり、そうした深夜の忍び歩きをもたらす存在として、彼の心から離れつつある現在の恋人は機能している。従つて、現在と過去の恋人に関する描写をまとめて「色好みの主人公の姿を、読者にとりあえず示すつもりなのであるか」とし、「当時としては、これぐらいのことは別にことわらないでも、読者は先刻御承知である」と述べた玉上論は、少なくとも現在の恋人に関しては当たらないことにならう。

一方、元恋人に関する描写はどうか。仮に「色好みの主人公」を印象づけることが目的であるならば、現在の恋人との逢瀬から、程なく新たな女へ心移りする様を描けばそれで十分で、元恋人を殊更に持ち出す必然性は薄い。また、主人公が最後に残した「かのみつとをに逢はじや」の一言に着目し、

・光遠は、中将の召使で、この白装束の女童の語らつて居る男である。中将は、この邸内の事情の大体は、光遠に聞いて知つて居るものらしい。それで突然、こんな質問を發したのである。(山岸徳平『堤中納言物語全註解』⁸)

・昔、主人公をこの女のもとに手引きした雑色の名で、後文「みつとすゑ」と同一人物か。

(大槻修校注『新日本古典文学大系 堤中納言物語』⁹)
のように、「みつとを」を後に登場する主人公の従者・光季と同一視する説に従えば、元恋人と新たな女とを結びつける理屈も立たなく

はないが、例えば『ほどほどの懸想』に見られるように、女房目当ての従者が、新たな女の邸にすでに通つていたという設定があれば事足りるのであつて、光季と元恋人との繋がりは物語の展開に何ら寄与しない。なお後に主人公が、

光季、「いかが女のため奉らざらむ。近衛の御門わたりにこそ、めでたく弾く人あれ。何ごとにもいとゆゑづきてぞ見ゆる」と、おのがどち言ふを聞き給ひて、「いづれ、この桜多くて荒れたる宿は、いかでか見し。我に聞かせよ」とのたまへば、「なほ、便ありてまかりたりしになむ」と申せば、「さる所は見しぞ。こまかに語れ」とのたまふ。かの見し童に物言ふなりけり。「故源中納言の女になん。まことにをかしげにぞ侍るなる。かの御をぢの大将なむ、迎へて内裏に奉らむと申すなる」と申せば、「さざらざらむ先に、なほ謀れ」とのたまふ。「さ思ひ侍れど、いかでか」とて立ちぬ。(五オウウ)

との応酬をする所から察するに、光季が女の邸に通つていたことを彼は知らなかつたと思しく、元恋人との間に光季が介在していた可能性は低いことから、右の考えは斥けられる。現在の恋人および友人が、ともに新たな女との関係に貢献しているのに対して、元恋人の存在はいかにも異質と言わざるをえない。

三

三谷邦明「堤中納言物語の方法」¹⁰は、この問題について積極的な解決案を示した数少ない先行研究である。しかし、以下のように述

べられる同論の案もまた、当面の疑問を氷解するものとは言いがたい。

この本文で特徴的なことは、まず、冒頭で〈現在〉通っている女のことを記し、更に〈過去〉に語らった女のことを記していることである。つまり、これから物語る〈未来〉の女との〈色好み〉がそれによつて示唆的に暗示されているのであつて、しかもその恋愛では、「月にはかられ」たり、「尼などにやなりたるらむ」と想定する中将の姿が暗示するように、女は中将によつて冷淡に扱われることさえあるかもしれないのである。このようにして、玉上琢弥が「無用」だと述べた表現は〈過去〉〈現在〉〈未来〉の〈色好み〉として、この本文では構造的に位置づけられているのであつて、後の物語展開に不可欠な布石なのである。この指摘は、元恋人に関する描写を初めて意義づけた点では注目に値するが、ここには重要な視点が一つ欠落している。それは三谷論と同様の観点から、

現在・過去ともに不毛なる恋が語られることによつて、これから進行しようとする将来の女との恋の結果が暗示されているのではないのか。

と述べた大倉比呂志「花桜折る少将」の手法⁽¹⁾にも言えることだが、未来を「暗示」する目的で過去の恋人を引き合いに出す、という理解自体には首肯できるものの、その言及のされ方が「暗示」を目的とするには奇妙に過ぎる点を、これらの論からは説明できないということがある。

従来この点に言及した研究は管見に及ばないが、新たな恋の相手

となる女を、元恋人の邸の新住人として発見するという『花桜折る少将』の展開は、他の物語を見渡しても例を見ない奇抜な趣向である。この場面が、須磨流離後の光源氏が未摘花の住まう故常陸宮邸を再来訪する『源氏物語』蓬生巻の、

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨すこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風に過ぎてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。

(『源氏物語』蓬生・②三四四頁)

との記述を踏まえていると思しいことは、夙に指摘されている通りである。だが、この蓬生巻を想起させることが狙いならば、忍び歩きの途上にある荒廃した邸に女を見出だす、という筋書きさえあればよい。仮に、光源氏がかつて未摘花に通っていたという『源氏物語』の文脈に合わせるべく、新たな女の住む邸に主人公がかつて通っていたという奇異な設定がなされた、と想定するならば、わざわざそこまでの模倣を必要とした理由が問われねばならないし、納得のいく答えはこれまで提出されていない。

物語の冒頭部における未来の「暗示」ということに關して、大倉比呂志「『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』」における主人公の〈恋〉の行方をめぐって¹²⁾は前掲大倉論を踏まえつつ、

主人公の〈恋〉の行方は冒頭において既に結末が暗示もしくは予告されているという点からも、『逢坂越えぬ権中納言』と『花桜折る少将』の二作品は同趣向の作品であったと考えられよう。と述べているが、その『逢坂越えぬ権中納言』の起筆が、

五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風に、うち匂ひたるぞ、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山時鳥も里なれて語らふに、三日月の影ほのかなるは、をりからしのびがたくて……。〔『逢坂越えぬ権中納言』一才〕と元恋人らしき女性を回想する表現であることは、この際示唆的と言える。つまり、未来の恋の不毛なることを「暗示」することだけが目的であるならば、『花桜折る少将』での元恋人への言及もまた、このように端的な表現たりえたと考えられるわけで、それが実際には奇抜な趣向を伴って詳細に語られている所に、この問題を追究する余地が残されているのである。

そうした中、井上新子「『花桜折る少将』の語りと引用」¹³⁾が、彼との恋愛によって不幸になった、あるいは将来なるであろう女たちが続けて記されたことを、物語全体、特に物語の結末部分との関連において十分に解き明かしたとは言えないのではないか。つまり、〈色好み〉とのみとらえるだけでは、こうした女たちの記述の物語中での意味づけが十全に行われえないのではないかと考える。

と三谷論を批判的に継承し、単なる「暗示」としての処理から、以下のようにより具体的な物語内の伏線へと議論を發展させた点は、興味深く思われる。

〈未来の女〉の周辺は、男を手玉にとる「誘惑性」を帯びた世界だと先に述べたが、それと連続する趣きを持つ〈現在の女〉〈過去の女〉は、『源氏物語』等の引用によって、男に飽きられ、そして忘れ去られた、「恨む女」・「待つ女」として造型されており、彼女たちは男に「いとほし」・「うしろめたし」という後ろ暗い思いを抱かせる存在としてあつた。彼の失敗は、物語の深層において、こうした女たちの鬱積し凝り固まった恨みの力が生んだものだとも言えるのではなからうか。つまり彼は、これまで不実を重ねてきた女たちからしつべ返しを受けたのである。それは、男の「いとほし」「うしろめたし」という女たちへの後ろ暗い思いがみせた幻影だとも言えよう。冒頭において、第一・第二・第三の女たちが連続して記されるのは、こうした實際は記されない恨みを抱いた女たちのしつべ返しを、物語の背後に幻視させるためだつたのではないかと思う。

もっとも、この指摘もまた、いま問題である元恋人の描写の妙に説明を与えるものとは言えない。しかし、元恋人の存在を玉上論のように「無用のもの」と切り捨てるでもなく、三谷論や大倉論のように未来の「暗示」の具とするでもなく、物語の結末との有機的な連関を読み取る点において、井上論には従うべき方向性が示されていたのではないか。

四

大上の後ろめたがり給ひて、臥し給へるになむ。もとより小さくおはしけるを、老い給ひて、法師にさへなり給へば、頭寒くて、御衣を引き被きて臥し給ひつるなむ、それとおほえけるもことわりなり。車寄するほどに、古びたる声にて、「いなや、こはたれぞ」とのたまふ、そののちいか。おこがましうこそ。御容貌は、限りなかりけれど。

(六ウ)

『花桜折る少将』の結末は、新たな女に仕える女童と恋愛関係にあった光季の口車によつて、上首尾に邸へ忍び込んだ主人公が、いよいよ略奪の本懐を遂げるといふ最高潮に至つて閉じられている。主人公が盗み出したのは実は目当ての女でなく、女の身の上を心配して居室に横たわつていた祖母上であつた、というこの急転直下の落ちは、

ここは、源氏が空蟬の所へ忍び、一夜語らう場面と似る。

(稲賀敬二『新編日本古典文学全集 堤中納言物語』^[14])
と言われるように、光源氏が空蟬と誤つて軒端萩と関係を持つ『源氏物語』空蟬巻の、

君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に、二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひよりはものしくおほゆれど、思ほしもよらずかし。いぎたなささまなどをあやしく変りて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましかれど、人違へとたどりて

見えんもをこがましく、あやしと思ふべし、本意の人を尋ねよらむも、かばかり迷るる心あめれば、かひなうをここにこそ思はめと思す。
(『源氏物語』空蟬・①一二五頁)

との展開を下敷きにしつつ、

『伊勢物語』六三段の「つくも髪」や『源氏』の源典侍のような、
姫の懸想の物語も思い浮かべるとよいであろう。

(三角洋一『講談社学術文庫 堤中納言物語全訳注』)と指摘される「姫の懸想」を捻つて重ね合わせたかの趣きである。目当ての女と誤つて略奪されるのが、軒端萩のような年近い女性でなく老女である点に、他にも指摘されている取り違えの類話とは一線を画し、一篇を烏譚物語に仕立てんがための工夫が見て取れる。

だが、この物語を取り違えの失敗譚として読む上では、その老女がさらに「姫の懸想」の類型とは異なる「法師」姿、つまり老尼であつたところに、傍線部における詳細な説明も相俟つて、とりわけ注意を払う必要があつたと思われる。

ただ単に高齢の祖母上を盗み出すのでなく、その女性が尼であるといふことの意味は、小島雪子「花桜折る少将」論^[15]に、

「法師にさへなり給へば」とは完全に剃髪した姿と考えられ、単に尼であるとされる以上に性を否定した存在なのであり、姫君との落差を強調した語り方がなされている。

と言われるごとく、落差によつて取り違えの滑稽味をいつそう強める効果もあると言えようが、おそらくそれだけではない。すなわち、結末部における「法師にさへなり給へば」という一文は、冒頭部で元恋人をめぐつて語られた主人公の独白「あはれの事や。尼などに

やなりたるらむ」を想起させ、両表現間の有機的連関をもたらす表現としてこそ読まれる必要があった、と本稿の視座からは考えられるのである。

本稿で立てた問題点に対する答えは、こうした理解の下に自ずと導くことができよう。主人公は、かつて自身の庇護下に置いていたにもかかわらず、都合良く見捨てて忘れ去っていた元恋人が、今や隠棲の地に身を落としていることを聞き、彼女を尼にしてみました。自らの行いを「後ろめたく」思っていた。それゆえ、彼女の住まっていた邸の新たな主人である女に関心を抱き、主人公が略奪に及ぼうとしたとき、彼は「尼」をその邸に見出さなければならなかったのである。恋人を尼にした背徳感を持つ主人公に、尼が与えられる——そのような、いわば因果応報の構造が、この物語には内在しているのではないか。だからこそ、主人公の新たな恋が芽生える舞台は、彼の元恋人の邸に設定される必要があったのではないだろうか。

『花桜折る少将』の冒頭部における、主人公の元恋人をめぐる一節は、以上のような尼をめぐるの因果律によつて、物語内に描かれる意味を持つ。「あはれの事や。尼などにやなりたるらむ」という主人公の後ろめたい独白は、やがて盗み出す女を老尼に取り違えることへの伏線として読み直され、従来統一性を欠くとされていたこの作品の前後半は、その実は緊密な構想によつて貫かれていた、と言いうるのであろう。

物語の結末に至つて読者は、主人公が目当ての女と老女を取り違えたこと、それが尼であったことに滑稽味を覚えるのみならず、彼

のかつての独白を思い出し、応報としての彼の失敗に笑みを増す。そのような周到な仕掛けのもとに、鳥詩物語としての『花桜折る少将』は形作られていると考えられるのである。

注

- (1) 『堤中納言物語』の本文は、国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本(H-600-721 函3)のデジタル画像により、私に整定を施した。
- (2) 三角洋一「講談社学術文庫 堤中納言物語全訳注」(講談社、一九八一年)。
- (3) 池田利夫「笠間文庫 原文&現代語訳シリーズ 堤中納言物語」(笠間書院、二〇〇六年)。なお同書は池田利夫『旺文社文庫 堤中納言物語』(旺文社、一九七九年)の改訂新版。
- (4) 松尾聡「堤中納言物語全釈」(笠間書院、一九七一年)。
- (5) 散文作品の引用は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。
- (6) 玉上琢彌「昔物語の構成」(『源氏物語研究 源氏物語評釈別巻一』角川書店、一九六六年。礎稿の初出は一九四三年)。
- (7) 鈴木一雄「堤中納言物語」(『堤中納言物語序説』桜楓社、一九八〇年。礎稿の初出は一九四九年)。
- (8) 山岸徳平「堤中納言物語全註解」(有精堂出版、一九六二年)。
- (9) 大槻修校注「新日本古典文学大系 堤中納言物語」(岩波書店、一九九二年)。
- (10) 三谷邦明「堤中納言物語の方法——〈短篇性〉あるいは〈前

本文)の解体化——」(『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版、一九八九年。礎稿の初出は一九八〇年)。

(11) 大倉比呂志「花桜折る少将」の手法——暗示の重層化——」

(『解釈』第三七卷第三号、一九九一年三月)。

(12) 「逢坂越えぬ権中納言」と「花桜折る少将」とにおける男主人公の〈恋〉の行方をめぐって——冒頭における結末の暗示もしくは予告の提示——」(『学苑』第八二六号、二〇〇九年八月)。

(13) 井上新子「花桜折る少将」の語りと引用——物語にみる〈幻想〉——」(『堤中納言物語の言語空間』翰林書房、二〇一六年。礎稿の初出は一九九五年。引用は礎稿による)。

(14) 稲賀敬二『新編日本古典文学全集 堤中納言物語』(小学館、二〇〇〇年)。

(15) 竹林俊浩「花桜をる少将・はいずみを読む——短篇物語の手法を考える——」(『解釈』第二八卷第一号、一九八二年十一月)には、

人違いの例としては、宇津保物語「藤原君」の中で、上野宮が広隆寺供養に事よせて貴宮を盗み捕らうとするのを、源正頼が察知し、十四歳の下臈を貴宮のように仕立てて、上野宮に迎え盗らせる話。落窪物語の落窪姫の婿君である少将の身代りとしておもしろの駒(兵部卿の少輔)が、中納言の四の君に婿入りする話などを顕著なものとしてあげることができる。

との指摘がある。

(16) 小島雪子「花桜折る少将」論——ちぐはぐさと過剰さと

——」(『日本文学』第四七卷第九号、一九九八年九月)。

(おかだ たかのり・九州大学大学院人文科学研究院准教授)